

「反転授業」をやってみた -2014 年度反転授業実践の中間報告-

金西 計英

高橋 暁子

(徳島大学 総合教育センター)

1. はじめに

2008年12月に文部科学省中央教育審議会から「学士課程教育の構築に向けて」が出され、国内の高等教育機関では単位の実質化に向けて様々な取り組みが進んでいる。中でも授業形態の多様化はめざましく、アクティブラーニングと呼ばれる新しい形態の授業が、積極的に取り入れられるようになった。

徳島大学では2014年度の科目において、反転授業(Flipped Classroom)と呼ばれるアクティブラーニングの一種の導入を試みている。反転授業は、学習効果の高さから、北米を中心に広まっている授業形態である。これまでも早稲田大学、佐賀大学では同様の試みがなされてきたが、一部の実験的な試みに留まると考えられる。2013年になり、反転授業の名称で、島根大学や山梨大学で、全学的な取り組みとしての実践が始まった。

反転授業という言葉が広まり、興味を持つ教員が増えた一方で、反転授業を始めるために必要な情報の整備や、トレーニングの体制が整ったとは言えない。そこで、実践する教員に向けて各種情報の提供が急務である。今回、我々は、ワークショップという形で、反転授業を始めるための後押しを目指す。

2. 授業形態としての反転授業

反転授業は、北米を中心に、高等学校や大学に広がった授業形態である。eラーニングと対面授業を組み合わせるブレンド型と呼ぶ授業の一種である。これまでも様々なブレンド型授業が提案されてきたが、反転授業はシンプルで分かりやすい構成と高い教育効果から、注目を集め実践が広がっている。

大学における反転授業は、MOOCの拡大を背景としている。サンノゼ州立大の反転授業ではeラーニングコンテンツとしてedXのコンテンツを活用している。二十世紀末以降、授業のコンテンツ化と、その公開の胎動は続いてきたが、MOOCの出現により大量のコンテンツ流布が始まった。このことは、時代の流れの一つの帰結だったと言える。

反転授業は、eラーニングと対面授業の組み合わせである。これまで、学生は対面授業で、知識の伝授を受けてきた。大人数の講義では、一方的に講師の話を聞くことがおこなわれてきた。授業の後に、復習として宿題に取り組むことで知識の定着を図る。しかしながら、日本の多くの大学生は、授業後に復習をおこなう習慣

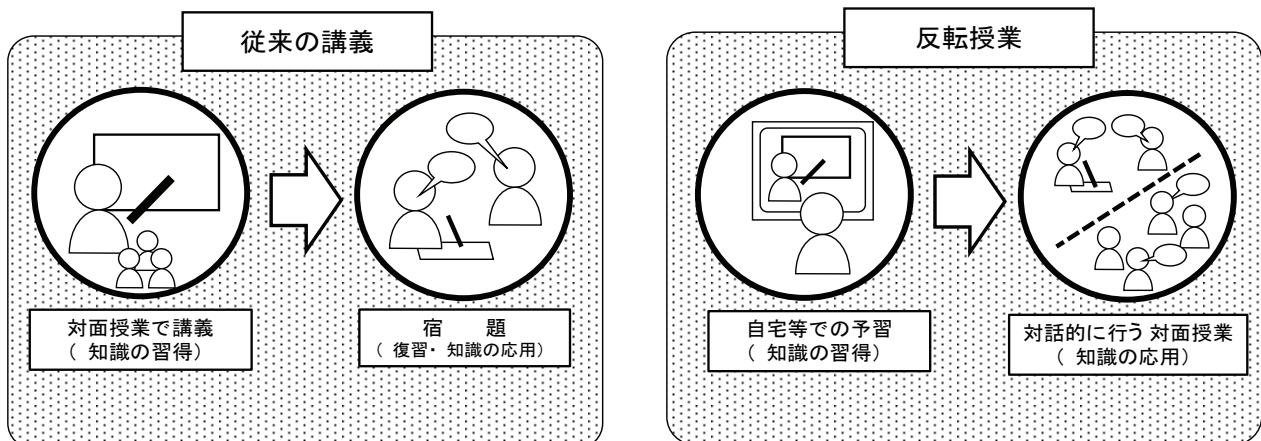


図1. 反転授業について

を持っていない。反転授業は、対面による知識伝授と家庭での復習を入れ替える。知識伝授を予習として自宅でおこなう。ネットでの配信ビデオとして電子化された教材を、パソコンや携帯端末を通じ、大学の共有スペースや自宅から視聴する。対面授業では、学習者がおこなった予習（知識伝達）の復習をおこなう。電子教材の視聴を前提に、議論をおこなう、あるいは演習に取り組む。特徴的なことは、教室では原則講義をおこなわないということである。

なお、反転授業では、復習に当たる対面授業で何をおこなうかによって、授業の目的が異なることが指摘されている。山内らによれば、知識の習熟を目指すものと、知識の深化（創発）を目指すものに分けられるとする。知識の習熟を目指す反転授業では、対面授業では演習が中心になる。学習者の理解度によって、学習者を複数のグループに分け、学習進度に沿った課題をこなすことになる。学習者は自らの理解状態に沿って、予習した内容を着実に身につける。一方、学習の深化を目指す反転授業では、全体にある課題を与え、課題に対する発表や議論をおこなう。他者との相互作用を通じて、単なる知識の記憶を目的とするのではなく、知識が現実的にどのように使われるのかといったことを実感し、あるいは、新しい着眼や発想を得るといった体験を得ることになる。

3. 徳島大学における反転授業とワークショップ開催の主旨

徳島大学では、2014年度より反転授業の実施を始めた。2014年度の前半は、反転授業の啓蒙を目的に、学内の教職員を対象に、説明会を複数回開催した。2014年度の後期から、各学部での実施を目処に、六名の教員が反転授業を試行している。

2014年度は、準備期間や、教員のスキルの点から、実践教員のおこない易い形態で実施した。そのため、実践の形態はさまざまである。今回のワークショップの開催時点では、後期の授業

期間の途中であり、実践の結果について正確な報告をおこなうことはできない。

今回のワークショップでは、実践の途中経過の報告を、実践中の各教員からおこなう予定である。ワークショップの参加者とともに、反転授業について理解を深める。具体的には、反転授業の実践について議論をおこなう。実践の途中でこのような機会を持つことで、後半の実践への変化が期待される。また、多くの参加者にとっては、反転授業の実施を促すことになると考える。以上のような観点から、ワークショップを企画した。

4. おわりに

本稿は、先ず、反転授業について述べた。次に、徳島大学における反転授業の実践の概要と、ワークショップの開催の趣旨について述べた。国内の反転授業は取り組みが始まったばかりであり、実践する教員にとって、手探りの部分が大きい。反転授業に取り組む教員間で情報を共有することは、教員の不安を払拭し、実践を充実させることになると考える。

今回のワークショップは実践の中間報告であり、今後、データの収集や分析をおこない、徳島大学の反転授業を評価し、最終報告をおこなう予定である。また、次年度以降の徳島大学の反転授業の充実へ繋げる予定である。

参考文献

- (1) 金成隆一：“ルポ MOOC 革命 無料オンライン授業の衝撃，” 岩波書店，(2013).
- (2) 向後千春，向後敦子，石川奈保子：“大学におけるeラーニングとグループワークを組み合わせたブレンド型授業の設計と実践，” 日本教育工学会論文誌，Vol.36，No.3，pp.281-290，(2012).
- (3) 山内雄平，大浦弘樹，上原裕美子（訳）：“反転授業（Jonathan Bergmann, Aaron Sams 著），” オデッセイコミュニケーションズ，(2014).